
黒曜の鬼

高町 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒曜の鬼

【Nコード】

N9384U

【作者名】

高町 湊

【あらすじ】

妖怪と人間の間に産み落とされた子供たち——こんけつ混血。

酒天童子を父に持つ五更氷芽いかりひめは、自分に混血の宿命を背負わせた父を倒すため、妖怪に関する情報収集の一環で、妖怪が起こした事件を解決する五更館いさらかんを経営していた。

そんな彼女のもとに、息子が意識を取り戻さないという依頼が。

調査の結果、依頼対象者は『枕がえし』に枕を返され、魂を枕がえしのテリトリーにとらわれていることが判明。その直後、氷芽も枕がえしの空間に引き込まれる。

枕がえしの空間での戦闘の末、枕がえしを倒し、氷芽は元の空間に戻る。そして依頼対象者の意識も元に戻り無事依頼完了。

徹頭徹尾貫き通す

序章―白銀の混血―

雲がかかり、月光が遮られている深夜。草原に一人の少女がいた。その横には一匹の小さな狸。

そして少女の前には、一体の、イタチのような存在。

そう、イタチの“ような”。

身体づくりはほぼイタチとほぼ同じ。けれど、二点だけ相違する部分があるのだ。

まず一つ。それはイタチの両前足が、鋭い鎌のような形状になっていること。そして最大の相違点は、その大きさだ。

後ろ足でその場に立ち上がっているのだが、その大きさが大の人間とほぼ同じなのだ。

その存在を、少女が見据える。

「アンタね、ここ最近、このあたりで“見えない切り裂き魔”と呼ばれている原因は」

見えない切り裂き魔。

それはここ最近、この草原に遊びに来た人々が遭遇している事件の名前だ。

何もない所で、突如として、まるで鋭い鎌のようなもので切り裂かれたかのような傷を負ってしまう。幸い死者は出ていないけれど、それも時間の問題だと考えられている。

そこで、少女の所に依頼が来たのだ。

見えない切り裂き魔という怪事件を解決してほしいと。

「カマイタチ。これ以上人間を襲うのは止めなさい。でなければ、ここであなたを消さなければいけない」

イタチのようなもの……カマイタチは、その口を開けて鋭い牙をのぞかせた。そして、地の底からわき上がるような重低音な声を響

かせる。

「なぜだ？ どうして人間に気を使わなければいけない」

「つまり、止める気はないと？」

コクリと頷くカマイタチ。

次の瞬間、正面を見ていたと思っていたカマイタチの視界に移るものが、草原から、夜空へと変わっていた。

一瞬、何が起きたのか理解できなかった。が、すぐに分かった。自分が今仰向けに倒れているのだと。

そして、カマイタチにそうさせたのは……。

「すまん、カマイタチ。こっちもビジネスだから依頼は果たさなければいけない」

カマイタチの腹部に左足を乗せ、少女がその顔を見下ろしている。カマイタチはそのまま、つい数瞬間に起きたことを思い出す。

突如視界から消えたと思った少女。その時には既に、カマイタチの足元へと走り込んでいて、次の瞬間には足払いをされていたのだ。そしてそのまま仰向けに倒れて、現在に至ると。

少女が、踏みつける足に力を入れる。

その手にはいつの間にか、刀身の黒い刀が握られていた。

「最後に聞いとくが、酒天童子しゅてんどうじがどこにいるか知らないか？」

「酒天……あの、妖怪三強のか？」

「ええ、現状では最強の鬼でしょうね」

「なぜ、貴様がその酒天童子の」

カマイタチがそう口にした時だった。

上空の雲が動き、月光が、少女の姿を神々しく照らし出す。

頭部から生えている、小さな、けれど、確かな二本の角。そして、腰まで伸びている白銀の髪。そして、黒曜石のような漆黒の瞳。

その時、カマイタチは全てを理解した。この少女の正体を。

「そうか……聞いたことがあるぞ。近頃、混血の鬼が、酒天童子の居場所を探していると。それが貴様か」

「正解。私は、どうしても酒天童子を見つけ出し、この手で八つ裂

きにしてやりたい。私に混血という運命を背負わせた罰として」

「そうか……悪いが、俺は知らんな」

「そう」

短くそう言い、少女は刀を握っている手を高々と振り上げ、

「なら、キミにもう用はないな」

カマイタチの心臓へと、突き立てた。

？

第一章 夢見の少年

十畳ほどの部屋。

室内には本棚と、ベッド、それにパソコンデスクがある。

外から光を取り入れているのは、入り口ドア正面にあるガラス戸のみ。しかし日が完全に沈みきっている今、青色のカーテンが引かれ、そこから光が入ってくることはない。

そしてそんな室内の中、線の細い、柔和な顔つきの一人の少年がパソコンデスクの前についていた。

ましはけん
真柴健……この部屋の主だ。

健は何やら、パソコンのディスプレイに見入っている。

画面上部から、下部へと眼光がせわしく動く。見終わると一番上まで戻り、もう一度見直す。

その間、まるで忘れたかのように瞬きすらしていない。

ディスプレイには、無数の人間の名前が表示されていた。いや、

正確には名前のようなもの、だろうか。

普通の名前のようなものも存在しているが、中には、
いかいか

星ける

サンダー

うに

など等、明らかに実名ではない名前（？）も存在している。

そしてそれら名前の上部には、大きめのフォントで『第×回ファンタジーライトノベル新人賞 一次選考結果発表』と表示されていた。

そう。つまり、これらは全て新人賞に応募して一次を通過した人たちのペンネームなのだ。

けれどこの中には……。

「やっぱり、ないか」

零れる嘆息。

何十回と見直したところで、健のペンネーム『柴犬』の名前は見当たらない。

がつくりと肩を落とし、椅子から立ち上がった健は、ベッドへうつ伏せの状態でダイブ。

一回転して、天井を眺める。

「結局今回も選ばれなかったか」

小説の新人賞に応募し、選外になったのは今回が初めてではない。年に二回ほど応募し、すでに三年間続けている。

「今年で高校も卒業で、来年からは書いている余裕もなくなるってのに……」

そろそろ決める時期なのかもしれない。

このまま小説家を目指すか、否か。

小さい頃から楽しみと言えば本を読むことだけだった。けれど、そのことになんら不満はない。

本の中でなら、物語の中でならどんなことだって起きる、起こせる。そして気付いた時には物語を考えるのが好きになっていた。

だからこそ憧れ、望んで夢見た将来の道。

けれどその道は険しくて、まだスタートラインにも立てていない。その現実を前にして、健の胸中に、黒い靄のようなものがかかりはじめた。

「諦めるしか、ないのかな……」

もちろん諦めたくない。けれど現実問題、健にはあまり時間が残

されていないのだ。

そのまま天井を眺めること数秒。

健は、急に肌寒さを感じ、両腕で身体を抱いた。

「何、この感じ……」

「何とは、随分な言い草ね。あなたの願いを叶えてあげようと思ったのに」

「——え？」

突然、健の耳に女性の声が届いた。それも、この家にいる人間の声ではない。

何かと思い上体を起こす。すると、すぐ正面に見知らぬ女性が立っていた。

艶やかな着物を身に纏っていて、しかし、胸元をはだけさせている。自己主張の強い胸が、そのはだけた胸元に谷間を作り、大きさがより強調されている。

顔は純和風のつくりで、切れ長の瞳。化粧が濃く、服装と相まって色香が漂っている。

年の頃は二十歳前半といったところか。そんな女性が、健のことを優しいまなざしで見つめていた。

突如として自室に現れた、謎の女。

普通なら警戒して当り前だろう。けれど、不思議と健はそんな気持ちにならなかった。ただ呆然と、その人のことを眺めるのみ。

「真柴健、あなたの願いを言ってみなさい」

「俺の……願い？」

「そう。あなたがどうしたいのか、何をしたいのか。大丈夫。私なら叶えてあげられるわ」

まるで言葉そのものに力があるように、女性と話すうち、健の目が光を失い胡乱とし始めた。発している言葉にも力がなく、まるで眠りに落ちる寸前のようなうた。

「俺は……小説家に……だからもっと、書き続けて……」

「ならばその願い叶えてあげる」

笑みを浮かべ、女性が健の顔面へと掌を当てた。
まるで、健の目を隠すように。
「そう、あなたの夢の中でね」

部屋と障子で隔たれている、板張りの廊下を、彼女は歩いていた。
家のつくりは、昔ながらの日本家屋。といってもそれは民家のレベルではない。この廊下一つみても、突当たりが見えない。それほど、この家……いや、屋敷が広いのだ。

歩きながら、彼女は違和感を抱いていた。

見える風景が、どことなく歪んでいるのだ。それに……。

「ねえ、聞いた？ お嬢様のこと」

「ええ。お噂は本当だったみたいですね」

「怖いわ。あんな化け物の世話をしなければいけないなんて」

不意に、どこからか無数の声が聞こえてくる。

それにより、彼女は確信した。

「こないだなんて、庭園にある灯籠がひとりでに壊れたのよ。きつとお嬢様のせいよ」

「まったく、ご自身も気付いているはずなのに。どうして平然と生きていられるんだか」

「早く消えてほしいわねえ」

「忌まわしい存在ね。人間と妖怪の混血なんて」

これは、幼き日の——まだ実家に住んでいた時の記憶だと。

二十畳ほどの洋風の部屋。

入口の扉正面には、足の低いテーブルと、それを挟むようにして二つのソファァーが鎮座している。また、部屋の脇には入り口とは別の扉がある。

そして、そんな部屋の奥には執務用の机。しかし、今はその用途を果たしていない。髪の高い少女が机に上体を預け、寝息を立てているのだ。

幼い、あどけなさの残る寝顔。

「……ん、んあ」

薄く開いた唇から洩れでる、うめき声。恐らく、目覚めの時が近いのだろう。

果たして、数分もしないうちに少女の体がもぞもぞと動き出し、
「ん、いけない。寝てしまっていたか」

おつくうそうに上体を起こすと、思いっきり伸びをした。

眠気眼で椅子から降り、右手の甲で目許を優しくこすりながら、大きくあくびをする。

背が低く、色白。青を基調とした着物を身に纏い、腰のあたりまであろうかという、艶やかな黒髪。また、意志の強い瞳はしているものの、顔付きはどこか幼さを感じ、日本人形を思わせる。

背恰好だけで見ると、年齢は十四・五歳といったところか。いや、下手をしたらもっと幼いかもしれない。

その幼さの残る少女は、つい先ほどまで見ていた夢を思い出し、憎々しげに顔を歪めた。

「まったく、あんな夢久しぶりに」

「氷芽様。お目覚めになられましたか」

少女が独り言を呟いている最中。不意に部屋の脇にある扉が開いて、毛布を持った一人の青年が現れた。

その容姿は、幼さの残る少女……氷芽とは正反対だ。

年は二十歳ごろか。体の線が細く、背が高い。恐らく百八十センチはあるだろう。顔立ち是非常に整っている優男風。そして何より氷芽と対をなしているのが、その服装だろう。執事が着るような燕尾服に、袖を通しているのだ。

「小狸か。私はいつから寝ていた？」

氷芽が、その青年へと視線をむける。すると、小狸と呼ばれた青

年は、満面の笑みを浮かべた。

「はい、かれこれ一時間ほどです」

「そうか。一時間前には私が寝ていると気付いていたにもかかわらず、今になって、キミは私に毛布をかける気になったのか」

そう言つて、氷芽は小狸の持つている毛布を指差した。

指摘され、小狸の顔が凍りつき、オーバーとさえ思えるほど勢いよく頭を下げた。

「申し訳ございません。すぐにお持ちしようと思ったのですが、その、氷芽様の寝顔を拝見していたら、いつの間にか五十分ほどが過ぎていまして。すっかりでした」

「いや、すっかりではないからな？」

「しかし、流石は氷芽様です。あのあどけなくも、気品あふれる寝顔。そして時折聞こえる寝言。なんと愛らしいことでしょうか！この子狸、興奮しすぎてどうにかなってしまいそうです！」

息も荒く語る小狸。

普通の男がしたら気持ち悪がられるだろうが、顔の整っているこの男がすると、自然と、見る者に不快感を与えない。

しかし、どうやら氷芽は違うようだ。

顔をしかめ、両手で体を抱きしめ、小狸と距離を取るようにして数歩下がった。

「キミは……ときどき思うのだが、その、変態だな」

「いえ、とんでもない。それほど氷芽様が素晴らしいですよ」

すぐさま綺麗な笑みを浮かべる小狸。そのせいで、氷芽はさらなる文句を言えなくなってしまった。

そのまま二人して向かい合っていると、不意に、来客を知らせる玄関のチャイムが鳴った。

「悪いが出てきてくれ」

「はい、了解しました」

そう口にし、小狸が部屋の外へと出て行った。

氷芽は執務機の椅子に座って、机の上に散らばっている書類を整

理する。そうしていると小狸が出て行った正面の扉が開き、

「氷芽様。お客様です」

小狸が、一人の女性を伴って戻ってきた。

「あの、こちらで怪事件を解決していただけると聞いたのですが」
どうやら退魔師としての……五更館いさづかんとしての仕事のようだ。

テーブルを挟むようにして、氷芽と、小狸に連れられて来た女性がソファーに腰をおろしている。ちなみに小狸は座らず、氷芽の後ろに控えている。

「五更氷芽いさづめです。そしてこっちが」

氷芽が、後方に控えている小狸を指差す。

「氷芽様の愛の奴隷、もとい身の回りのお世話をさせていただいております。小狸と申します」

笑みを浮かべ、恭しく頭を下げる小狸。

「それで早速ですが、ご依頼の内容は？」

女性は四十代あたりか。髪をアップでまとめており、化粧も濃い。スーツに身を包んでいるのを見ると、専業主婦ではなさそうだ。

氷芽に先を促され、女性がゆっくりと口を開く。

「息子のことなのですが、もうかれこれ、一週間眠ったままなので」

「一週間も？」

「ええ。お医者様に見せても原因不明だと」

なるほど、女性の年齢から察すれば、子供がいても何ら不思議はない。

けど、氷芽にはどうしても腑に落ちない部分があった。

子供が原因不明のまま、一週間も眠りにについているのだ。心配するのは親として当たり前だろう。けれど、この女性から感じるのは……。

「あの、ちょっといいですか？」

女性から突然声をかけられ、氷芽の思考が中断する。

気付けば、まるでいぶかしむような視線が氷芽に投げかけられていた。

「あなた中学生でしょ、学校はどうしたの？　ちゃんと行かないとだめですよ。それにお父様かお母様は？　ご家族の方がここを経営」
しているのでしょうか？

女性が、そう残りを口にする時だった。しかし、それは氷芽が両拳を机にたたきつけた音によってかき消された。

顔を上げる氷芽。真つすぐと女性を見据える。まるで食いつきそうな視線だ。

「お客様。大変申し訳ありませんが、当館の主はこの私です。そして」

ヒクヒクと、こめかみが震えている。恐怖を覚えるほどの笑みがその顔に張り付いていた。

「私は十七歳。義務教育は終えています」

「……え？」

「だから、私は十七歳。義務教育は終えていますから、別に学校に行っていないとも問題はありません。それに、高校卒業程度の教養は身に付けておりますので」

呆然とする女性に、氷芽は再度そう説明した。心持ち、十七歳という言葉に力を入れて。その氷芽の後方では、小狸が微笑ましそうに笑みを浮かべている。

やがて、思考が戻ったのだろう。

「あ、ああそうなの。ごめんなさいね」

女性はそう言って、軽く頭を下げた。

「いえ、分かっていただけなのなら結構です。それでご依頼の話に戻りますが、もう少し詳しくお話を聞かせていただけますか？」

コホンと可愛らしく咳払いをし、氷芽が話を戻した時だった。不意に女性は腕時計へと視線を落としたかと思うと、ソファから腰を上げた。

突然なことに、目を丸くする氷芽。

「お客様、どうかなさいました？」

「ごめんなさい。会議の時間が近いので、そろそろ失礼させていただきます」

「会議って……詳しい話も伺っていないのに」

同じく氷芽が立ちあがると、今度は女性がソファーに腰を落とし、机の上に長方形の紙を懷から取り出すと、鞆の中から出したシャーペンシルで、何やら書き連ねた。

書き終わったのだろうか。シャーペンシルを鞆にしまい、女性が立ちあがる。そしてその紙を、裏表を逆にして氷芽に差し出した。反射的に受け取り、紙面に視線を落とす。そこでようやくその紙が何なのか分かった。

「裏面に住所を書いておきましたので、すみませんが、出向いてもええですか？ お手伝いの者がいますので、案内するように話をしておきます。それでは急ぎますので、私はこれで」

口早にそう言い切り、身をひるがえして扉へと向かう女性。

「小狸、お送りして」

「はい、氷芽様」

言いつけ通り、小狸が女性をエスコートするように部屋を後にした。そのことを確認し、氷芽は再度視線を手渡された紙へと戻した。長方形で適度な厚みのあるその紙……名刺には、こう書かれていた。

真柴建設代表取締役

真柴（真奈美）
ましはまなみ

なるほど、確かに専業主婦とは違う雰囲気を感じ取るわけである。なにせ女社長なのだから。しかも真柴建設といえば、近年成長著しい企業だ。

名のしれた会社の女社長。その肩書きが、氷芽の最も嫌悪する女と結びつく。

あの女の顔が、頭の中にちらつく！

「さっきの夢と言い、まるで厄日ね」

氷芽は名刺を握る手に力を入れ、苦虫をかみつぶすようにして、そう呟いた。

「まったく、あの子も余計な仕事を増やしてくれるわね」

真奈美を外に止めてある車まで小狸が送る最中、玄関を出た所で、彼女は嘆息気味にそう呟いた。

真奈美が外に出た後、扉を閉めた小狸は、ふと気になった。

「あの、あの子というのはご子息の」

「ええ、そうですよ。ようやく会社の認知度も上がって、これから大変な時期だというのにいい迷惑だわ。お手伝いさんの目もあるから、放っておくわけにもいかないし」

ぶつぶつと、まるでさも自分の子供が邪魔のように呟く真奈美。

そんな彼女の姿を見て、小狸は得心した。

さきほど氷芽が真奈美の素性を知った時、少し様子が変だった。まるでここにはない何かを見ているかのような。

けれど、こうやって話をしてみると当り前と思えてしまった。

（実際にあつたことはなく、話で聞いたことしかないですが、似ていますね。顔とかではなく、性格が。氷芽様の……）

そう結論づくと、主の心中を察し、小狸は不安で胸が押しつぶされそうになった。

あの小さな体に収まっている心が、憎しみや、怒りで傷つけられていないか。

なぜなら真奈美は、氷芽がこの世で最も憎んでいる人間、彼女の母親と似ているのだから。

小狸が真奈美を家の外まで送っている最中、氷芽は執務机について書類を書きこんでいた。依頼主の名前、連絡先、依頼内容などをまとめている。

そうしていると扉が開き、小狸が戻ってきた。

「氷芽様、ただ今戻りました」

「御苦労。すまないが、何か飲むものを持ってきてくれるか？」

「あ、はい」

視線は書類に向けたままのやり取り。しかし、氷芽は気付いていた。返事はしたものの、一向に小狸が動く気配がないことに。それでもしばらくは書類と格闘していたが、やがて。

「キミ、何を呆けているんだ」

顔を上げると、やはり小狸は扉の前から微動だしておらず、真つすぐ氷芽のことを見ていた。

小狸の表情を見た氷芽は、彼が何を考えているのかなんともなく察し、深々とため息を吐く。

「なぜキミが、そんな顔をする」

「氷芽様が平然としているからです。ですから代わりに」

「まったく。バカだな、キミは。大方さっきの依頼主が、あの女と似ていると思ったのだろう。確かに私も初めはそう思ったが、だが違うさ」

立ち上がり、不安げに瞳を揺らしている小狸の許へと向かう氷芽。「彼女は文句を言いながら、それでもここへ来た。だから違うんだ。己の欲望の為にだけに悪魔に身体を捧げ、私という忌まわしい存在を産み落としたあの女とは」

そう言い、自身よりも三十センチ以上は上にある小狸の瞳を見返す。すると、小狸がいきなり氷芽の両手を、自身の掌で包み込んだ。突然のことに慌てる氷芽。

「ちょ、キミ。どうしたんだ」

顔を真っ赤にしてうるたえるその様は、普段の不遜な態度とは結びつかない。異性に手を握られて緊張している、純情な乙女そのものだ。

そうして軽いパニックに陥っている氷芽に、

「氷芽様は忌まわしくありません。あなたは己の血に負けないよう、強く生きようとしている。それは、とっても尊いことです」

いつになく真剣な瞳で見返す小狸。

言い聞かせるように、言葉を続ける。

「そんな氷芽様だからこそ、私は一生ついていこうと決めたのです。ですからどうかご自身を卑下するようなことだけは」

そう言い、目を閉じた小狸は、未だ氷芽の手を包み込んでいる自身の手へと額を付けた。

その様子はまるで神に祈りをささげているかのよう。

呆氣にとられ、言葉を失っている氷芽。しかし小狸の視線が外れると、その口元に笑みを浮かべた。安らぎに満ちた笑みを。

それから、鼻で笑い、おもむろに口を開く。

「ふん、何をえらそうに説教している。第一私たちにはあの女よりも、先に片づけなければいけない存在がいるではないか」

その言葉に、小狸は手を離して顔を上げた。

片づけなければいけない相手。

それは、氷芽が母親と同じ……いや、それ以上に憎しみを抱いている存在。その存在さえいなければ、人間として生まれることが出来たと、何度思ったことだろうか。

今更その存在を消したところで遅いが、しかし、氷芽はその為だけにこの“五更館”を作った。妖怪が絡む怪事件の解決を請け負っていれば、いずれ、あの存在に行きあたるだろうと考えて。

「無謀なことだろう。このまま進んであの存在に突きあたるかどうか怪しいものだ。けれど徹頭徹尾、この想いだけは貫き通す」

コッソと、氷芽が小狸の胸に軽く右拳を突き出した。

「私のこの手で奴を、酒天童子を殺す。その為には、お前が必要だ。私が想いを貫き通す為の刃として」

そう語る氷芽の瞳は、いつにもまして太陽のように輝かしい、強い意志を宿していた。

翌日、氷芽と小狸は一件の家の前にいた。

早速、昨日依頼のあった真柴家に赴いたのだ。

目の前の家は、外壁がクリーム色の洋風造り。庭も広く、三階建てでなかなか立派だ。

門の所にある呼び鈴を押す。するとほどなくして、呼び鈴の場所から中年ぐらいの女性の声が聞こえてきた。ただし、真奈美の声ではない。

「はい、真柴ですがどちらさまでしょうか？」

「五更館からまいりました五更というものですが、こちらの奥様から、依頼を受けまして。お話は通していただいていると窺ったのですが」

「ああ、はい。ちょっと待つてくださいね」

受話器を置いた時のような音がして、それから数十秒後。玄関のドアが開き、恰幅のいい、六十代ほどの女性が姿を現した。

女性はそのまま、氷芽たちのいる門前までやってきた。

「どうもどうも、お待たせしました。私はこの家でお手伝いをしている市原いちばなと申します。どうぞお入りくださいませ」

そう言って、女性……市原は門を開けて二人を招き入れた。

家の中に入った二人は、ある一室へと通された。

十畳ぐらいの広さ。入口正面はガラス戸になっているが、しかし、今は薄いレースのカーテンによって閉め切られている。部屋の隅には本棚や、テレビ、勉強机。

そして、一人の少年が仰向けで寝ている、ベッドが一つ。

それを見て、氷芽たちは理解した。

この子が依頼内容にあった、目を覚まさない子供だと。

パツと見、年齢は高校生ぐらいだろうか。

（随分と顔色が悪い。それにやつれているな）

顎に手をやり、考え込む氷芽。

けれど、これを見ただけでは何が原因となっているのか判別は付かないか。やはりもつと情報がいる。

思考を中断し、氷芽は市原と向き合う。

「市原さん。この方が眠りについた前後で、何か変わったことはなかったですか？ 何でもいい、教えて欲しいのですが」

「変わったことですか」

腕を組み、考え込む市原。しかしやがてポンツと手を打った。

「そういえば、奥さまは知らないようですが、坊ちゃん、小説家になることが夢だったみたいなんですよ」

「小説家？ それのどこが」

「私、見ちゃったんです。坊ちやまが目を覚まさなくなる前日、小説の新人賞に落ちてしまったと、この部屋で酷く落ち込んでいるのを。それで翌朝、起きられてこないのので部屋に失礼したら」

「眠り続けて、起きる気配がないと」

頷く市原。

氷芽は、傍らに控えている小狸に視線を向けた。

「キミはどう思う？」

「これだけでは何とも。ただ、その一件で精神的に弱り、隙を狙われたというのはあり得えますね」

小狸の言葉を聞き、氷芽は依然眠り続けている少年の枕元へと移動した。腰をおろして、顔を覗き込む。こうやって見てみると、やはり血色の悪い顔をしている。

それから、氷芽はおもむろに身体に手をかざし——顔を驚愕に染めた。

それからすぐに眉を細め、逡巡する。

「市原さん、聞きたいことがあります。眠りについた時に枕はどこにありました？」

やがて視線は少年に向けたまま、氷芽は市原に問いかけた。

突然の、それも意図の読めない質問に困惑する市原。しかし、すぐに思い出すように目を閉じると、ややあつてから、

「そういえば……確か、足元にあつた気が」

呟くようにそう言い、目を開けた。

「普段はどうです？ 寝相は悪い方でしたか？」

「いえ、むしろいい方だったはずです」

市原のその答えに「そうか」と短く呟き、ずっとその場で立ち上がった氷芽。

そのまま、市原の前まで移動し、真剣な面持ちで真つすぐ視線を向けて。

「のどか乾いた」

ただ一言、そう伝えた。

目をパチクリとさせる市原。恐らく、突然なことに思考が追い付いていないのだろう。啞然としている。

そこに、氷芽はさらに重ねた。

「何だ。この家は、客人に茶の一杯も出さないのですか？」

「え、あ、ごめんなさいね。すぐに用意します」

二言目でようやく思考を取り戻した市原は、そう言つて、急いで部屋を後にした。

市原が出て行つた後、扉が完全に閉まつたことを確認し、

「氷芽様。何かお分かりになられたのですか？」

小狸がそう聞いてきた。

氷芽は、視線をベッドに眠る少年へと戻す。

「魂がなかったよ」

そして、心持ち沈痛な顔を浮かべ、静かにそう告げた。

魂とは、人の意識、あるいは精神そのもの。魂がなくとも身体は生きている。が、栄養は摂取できないわけだから、相応の処置を取

らなければいずれは死に至る。もともと、精神なき肉塊を、生きている人と呼ぶかは定かではないが。

とにかく……それが、少年の今の状況だ。

「見ただけでは感じなかったが、近づいて把握した。あの少年、魂を抜かれている。それでは目を覚まさないはずだ」

「魂が抜けて……枕が別の場所に……そういうことですか！」

「キミも気付いたようだな」

口元に手をやって考え込んでいた小狸の顔がぱつと輝くと、氷芽は褒美とばかりに、小狸に頬笑みを向けた。

しかしそれもほんの数秒。すぐに、鋭い視線をベッドへ戻して息を吸い、

「今回の事件、十中八九——“枕返し”の仕業だ」
言い放った。

二人してベッドに近寄り、小狸が頷く。

「なるほど。枕返しの仕業なら、全てに説明がきますからね」

「ああ。その昔、人は寝ている間に魂が身体から抜け、枕を通して夢の世界へ旅立っているとされてきた。実際にその考え方は正しいし、だからこそ、枕返しという妖怪は厄介なのだ」

そもそも枕返しとは、広く知られている通り、対象者が寝ている間に枕を移動させて、人を死に至らしめる妖怪だ。だが、ここで言う所の死は、精神の死。

枕を移動させられたことにより、夢の世界から、魂が肉体へと戻れなくなるのだ。命そのものの死は二次的な結果に過ぎない。

「さすがです、氷芽様。いちはやく今回の事件の真相に気がつくとは」

「普通だよ。それに、問題はここからだ。身体から引き離された魂を、どうやって取り戻すかだ」

「枕は元に戻っていますから、夢の世界とはつながっていますね」

「ということは、だ。何らかの原因で魂が夢の世界に囚われているか、この子の魂を枕返しが保有しているかだな」

頭を突き合わせ、考え込む二人。

その時、異変が起きた。

突如として、少年の体が発光しだしたのだ。そして……。

「妖気の反応だと!？」

氷芽が叫んだ次の瞬間、発光していた光が部屋の中を包み込み……

…光が治まった時には、そこに氷芽たちの姿はなかった。

光に包まれ、その光が治まった時、氷芽たちの眼前には信じられない光景が広がっていた。

「小狸。私達はさっきまで、少年の部屋にいたと思うのだが」

「はい。その通りです」

「ならばここはどこだ？」

嘆息し、辺りを見回す氷芽。

広大な平地。先が見えず、まるで海のと真ん中に立っているかのようだ。そして上空には、無数の言葉達。意味のない言葉の羅列が、上空に浮かんでいる。

黒い硬質な地面を踏みしめながら、数歩進む氷芽。気付けば、氷芽は草履を、小狸は靴を履いていた。

「何なのだ、この空間は」

「あら、教えて欲しいのかしら？」

再度、氷芽が呟いた時だった。そんな女の声が聞こえてきたのは、突然なことに身構える二人。しかし声の主らしき姿は見当たらない。

……いや、いる!

目を凝らし、前方を凝視する氷芽。すると、十メートルほど前方に、黒い靄のようなものが立ち込めていた。

それは次第に人の形を成し……。

「ようこそ、夢の世界へ」

一人の、女となった。

髪の長い女だ。氷芽と同じく着物を着ている。

顔は純和風のつくりで、切れ長の瞳。美人と形容できるだろう。化粧が濃く、服装と相まって色香が漂っている。

そしてその女の背後には、

「氷芽様」

「ああ、気付いている」

この場には不釣り合いな机と、その上に置かれているパソコン。そして、その机についてキーボードを打っている少年の姿があった。そう、ベッドで眠り続けている少年だ。

「女……いや、枕返し。この世界は何だ？」

「あら、随分直球ね。どうして私が枕返しだと思うの？」

氷芽に枕返しと呼ばれたその女は、小首をかしげてみせた。それに、氷芽は鼻を鳴らして憎憎しげに答える。

「簡単なことだ。匂うんだよ、貴様の体から妖怪の気配が」

突きつけた言葉。それに女、いや、枕返しは……。

「いい感性をしているのね、お嬢ちゃん。強い魂を感じたからここに引きこんだけど、どうやら、ただの人間じゃないみたいね。退魔師かしら？」

「私のことはどうでもいい。それよりも答える。ここはどこだ？」

「あら、せっかちなね。けどいいわ。特別に教えてあげる」

そう言つて、女は少年の許まで行き、その背後からしなだれかかった。首に腕を回し、耳元に息を吹きかける。

「ここは、この子の夢」

まわりつかれているというのに、少年は一向に構う気配がない。ただひたすら、キーボードで何かを打っている。

「小説家になりたくて、書き続け、新人賞に何度も出して。いい線まで行った時もあった。けど、所詮はそこまで。それに、この子には余裕がなかった。はやく賞を受賞しなければ、母親の会社を継がされるから。そうでなくとも、高校を出たらその為の勉強が始まるでしょうね。そうなれば、書く時間も取れなくなるかもしれない。」

だから結論を出した」

少年から離れる枕返し。

「自分には才能がない。だから、作家になるのを諦めよう」と

「それで、貴様が枕を返したのか？」

「ええ、そうよ。夢はすべてが叶う場所。だから魂が夢の中にあれば、その世界で彼は永遠に小説を書き続けることが出来る。作家になるって目標を抱き続けられる」

そう言って、枕返しは髪をかきあげた。とても嗜虐的な笑みを浮かべて。

「理由としては上等でしょ？」

枕返しのその言葉は、言外に、別の理由があると言っているのと同義だ。それも、大義も何もない私欲だと。

そのことに気付き、目を細める氷芽。

「一つ聞く。お前を倒せば、彼は元に戻るのか？」

「さあ、どうかしらね？」

枕返しがそう口を開いた次の瞬間、氷芽は地を蹴っていた。

口ではとぼけられたが、氷芽はほぼ確信したのだ。この妖艶なる妖怪が少年の魂を、この夢の世界にくくりつけているのだと。

だから、枕返しを倒せば……。

しかし、

「氷芽様、止まってください！」

小狸によって呼び止められ、その場にとどまった。

不機嫌に眉を吊り上げ、振り返る。

「どうしたんだ、急に止まれなどと」

「前を見てください。何か現れます」

「何かって……」

そう呟き、氷芽が視線を前方に戻した時だった。確かにそれは、現れた。

地面に円形に影が出来たかと思うと、そこから西洋風の騎士甲冑が、まるで地面の中から浮き出るようにして現れたのだ。その手に

は西洋風の剣が握られているが、しかし、甲冑の中からは人の気配が全くしない。

（ただの甲冑？ いや……）

氷芽の思考はそこで止まる。甲冑が、突如突進してきたのだ。

肉迫し、甲冑が剣を思い切り振り上げ——そして、振り下ろす。

力任せの一閃。普通ならば、その一太刀のもとに肉体を切断されているだろう。しかし、氷芽は違った。

迫りくる剣の刃を、両手で挟み、受け止めていたのだ。

——真剣白刃とり。

甲冑がどうにかして剣を動かそうとしているが、ビクともしない。氷芽はその隙に、剣を固定したまま体重を左足に乗せて、甲冑の左腹部に回し蹴りを叩き込んだ。

吹き飛ぶ甲冑。そのまま地面で二・三度はね、全く動かないようになっってしまった。

そのことを確認し、氷芽は視線を枕返しへと戻す。

あの甲冑から、妖怪の類の気配は感じなかった。本当に、中に何も無い甲冑が動いているだけだったのだ。

一番に考えられるのは、枕返しが呼びだしたということ。けれど、枕返しにそんな習性はなかったはずだ。

「今のは何だ」

「言っただでしょ？ ここは、この子の夢の中。ここで起こることはこの子の想いのまま。願いのまま」

そう言っただけでクスリと笑うと、枕返しは少年の許へと向かって、耳打ちをする。

「さあ、一体だけでは駄目だった。なら、もっと……そう、あの二人を取り囲めるぐらいの数を召喚して」

そんな枕返しの言葉に少年は頷くと、今までに増して、タイピングの速度を上げた。

するとその言葉通り、氷芽と小狸を囲むようにして、さっきの影が六つ現れた。そしてそこから、またしても甲冑が。

ここまでくれば、氷芽たちにも理解出来た。この甲冑を生み出しているのが、助け出すべき少年なのだと。

「さあ、どうするかしらお嬢ちゃん。私を倒すには、その甲冑たちが邪魔。けれど、その甲冑のもととなっている少年を倒すことは出来ない。手詰まりね」

確かに、枕返しという言葉は当たっていた。

氷芽自身気付いている。今の自分達では、この包囲網を突破して枕返しを倒し、少年を救うのは至難の業だと。

けど、ならば今の自分たちでなくなればいいだけだ。

「小狸、やるぞ」

「はい、氷芽様」

口元に薄い笑みを浮かべて、相手を見ないでの一言。それに、小狸は恭しく頭を下げた。

「ふふ、この状況でなにをしようというの？」

「黙っている」

顔の正面に右手を当てる氷芽。

目を閉じ、精神を集中させ——自分の中に押し込んでいる“それ

”を、表へと出す。

「鬼血——解放」
きけつ かいはう

顔の前に持ってきていた右手を、そう呟くと同時に振り下ろす。

すると、つい先ほどまで艶やかな黒色をしていた頭髮が、頭皮に

近い場所から白銀へと染まり始めた。そして、頭部には小さな角が二本。

次いで、子狸の足元から煙が立ち上り始め、その体を包み隠した。

そして煙が治まった時、そこに小狸の姿はなかった。

代わりにいたのは、小さな狸が一匹だけだ。

「アンタ達、まさか……」

驚きで、枕返しの表情が歪む。が、氷芽たちは止まらない。

「小狸、頼んだ」

「はい」

氷芽の呼びかけに応じ、小狸と呼ばれた狸は、氷芽の前で大きく跳躍した。跳躍の最高点で一回転。

「変化の術」

するとまたしても狸の周りにだけ煙が発生した。

氷芽は、煙の中に迷うことなく右手を突っ込み、そして、それを握りしめ――

「小狸、妖刀形態」

煙幕を切り裂き、振り下ろす！

「童子切！」

その右手に握られていたのは、一振りの日本刀。

刀身は細く、そして漆黒。

驚愕の色に染まっていた枕返しは、しかしその刀……童子切と氷芽を見比べて、笑みを浮かべた。

「そういうことね。男は化け狸。そしてお嬢ちゃんはその角を見る限り鬼……いえ、にしてはさっきまで本当に人間のようだったし」

「当たり前だ。その言葉通り、先ほどまでは本当に人間だったのだから」

「どういう……そう、混血ね」

頷き返す氷芽。

混血。それは、人間と妖怪の血が混ざりあった存在。人間ではなく、されど妖怪でもない忌まわしき存在。

氷芽が、それに当たる。

童子切を構え、甲冑たちの間から枕返しを見返す氷芽。

「先ほどまでは、鬼の血を身体の中に封じていたが、今はそれを開放させてもらった」

「そう。けれど驚いたわね。まさか混血が人間の味方をしているなんて」

「人間の味方？ ふん、冗談はよせ」

口元に笑みを浮かべ、

「私は誰の味方でもない。この職に身を置いているのは、我が願い

をかなえるため。言うなれば私が人間を利用している。奴と……酒天童子と刃を交える為に」

氷芽はそう返した。

酒天童子。

三大妖怪の一角で、最強の鬼。そして何よりも氷芽の……。

「私が生まれるよりも前、母は会社を経営していたが、上手くいっていなかったらしい。そんな時、出会ったのだろう。母は会社を立て直す為、そいつの力を借り……代償として己の肉体を捧げ、その身に宿した」

眉間にしわがより、氷芽の顔に、剣が増す。

「人間と、そいつ……酒天童子の子である、この私を！」

ぶわっと、氷芽の体から膨大な量の妖気が放出された。それだけで、枕返しはその身を切断されたような錯覚に陥った。

圧倒的なそれは、まさしく氷芽が最強の鬼の血をひいている証明。枕返しの額を、嫌な汗が伝う。

「私は一生、あの女を許せん。けれど元凶は違う。最も愚かなのは、母を惑わし、私に混血としての宿命を強いた、酒天童子」

「だからこそ、戦うというの？」

「この身が混血であることは変わらない。けれど、せめて報いだけは受けさせる」

「出来ないわよ。あなたは、ここで私にその魂を捧げ、肉塊と化するのだから」

その言葉を合図に、六体の甲冑が同時に氷芽に襲いかかった。氷芽は直前まで身動きせず、一瞬を見極める。

（今か！）

そして、肉迫される直前にその場で跳躍した。すると、その下では目標物を失った甲冑たちが、動きを止めることが出来ず互いにぶつかり合い、仰向けに倒れた。

着地し、氷芽が一直線に駆ける。

その動きは、先ほどまでとは比べようもない。まさに疾風。途中で新たな甲冑が召喚されるが、間に合わない。

またたく間に枕返しへと肉迫した氷芽は、枕返しの喉元に向けて突きを放つ。

しかし、その動きは直前で止まった。

今の一撃、氷芽がその気ならば確実に殺せていた。にも拘らず寸止めされた。その事実が、初めて枕返しを刺激した。

「どういうつもり？」

苦虫をかみつぶしたような顔。対して、氷芽は淡々と返す。

「まだ答えてもらっていない」

「何を？」

「酒天童子を知っているのか、知らないのか」

童子切が、僅かに枕返しの首元に食い込む。氷芽からの催促だ。

そのことに観念したのか、枕返しは大きく息を吐いた。

「知ってはいる。けれど、今どこにいるかは、残念だけど」

「そう」

氷芽の顔に、雲が陰った。

またいつもと同じだ。酒天童子自体は有名で、存在を知っている者は多い。けれど、何故か今の居場所となると、みな知らない口をそろえて言う。

それに……恐らくだけど、そのことについて誰も嘘はついていない気がする。

「酒天童子を倒すつもりなら、やめときなさい。無駄死にするだけ。あれは強いなんてもんじゃない。次元そのものが違う」

「そう、それで？」

「それでって……」

枕返しの首元から、童子切をどかす氷芽。

見逃せてもらえた？

その考えが頭の中に浮かび、一瞬だけれど、枕返しの顔が和らぐ。

けれど次の瞬間。

「奴の強さなんて関係ない。私は、奴を倒す。この想いだけは徹頭徹尾、何があっても貫き通す！」

振りあげられた童子切が、枕返しまくらがえしの体を真つ二つに裂いた。

？

終章――そして、日々は続いていく――

夕方。真柴邸を後にした氷芽たちは、夕日が差す閑静な住宅街を歩いていた。

ちなみに、氷芽は鬼の血を再度封印し、人間の姿に戻っている。そして小狸も、いつもの人間の姿へと、化け直していた。

あの後……枕返しを倒してすぐ、氷芽たちは元の世界に戻ることができるが出来た。もちろん、眠り続けていた少年も目を覚ました。

その後、真奈美に事件解決を報告。報奨金の交渉を電話でして、真柴邸を後にした。電話口で真奈美がどこか安堵した様子だったのは、氷芽の気のせいではないだろう。

無言のまま、二人して並んで歩く。

氷芽の心の中には、ある人物の顔が浮かんでいた。

それは、つい先ほど助け出した少年。

もしかしたら、自分もそうなっていたのではないかという、氷芽にとってもっもIfの姿。

時間は、枕返しを倒した直後へと遡る。

枕返しを切り捨て、再度謎の光に包まれた氷芽たちは、気付いた時には元の少年の部屋へと戻っていた。

呆然と、辺りを見回す。

机にテレビ。そして、初めて部屋に入った時には気がつかなかっ

たが、無数の本が収納されている本棚。

やはり、あの夢の世界から戻ってきたようだ。

そのことを確認し、氷芽は安堵の息を吐いた。

握ったままだった童子切を床に置き、

「鬼血——封印」

短くそう言葉を紡ぐ。

すると先ほどとは真逆に、今度は頭皮に近い場所から、氷芽の髪がもとの艶やかな黒へと戻っていった。いつの間にか、二本の角も消えている。

鬼の血を封じ込めたのだ。

「小狸。キミも今のうちに化け直せ」

「そうします」

氷芽がそう声をかけると、童子切から小狸の声がした。そして次の瞬間、童子切の周りに煙が発生し、治まった時には、もとの人間の姿をした小狸がそこにいた。

「どうだ、どこか不具合はあるか？」

「お気遣いありがとうございます。ですが大丈夫ですよ」

ためしに肩をまわしているが、なるほど、確かに不調は見受けられない。

互いの無事を確認し、二人はベッドで眠る少年へと視線を戻した。

「さて、こうして私たちは戻ってきたわけだが……」

「大丈夫ですよ。氷芽様に間違いはありません。きっと目覚めますよ」

「だいたい——いや、どうやらその通りのようだ」

氷芽の顔に、柔らかな笑みが浮かんだ。

「ん……ん」

二人の視線の先。ベッドで眠る少年がもぞもぞと動き、唇の隙間から声を漏らしているのだ。恐らく目を覚ます予兆だろう。

そう待たないうちに——ゆっくりとまぶたが開き、少年が目覚めました。

「あれ、俺は……」

ムクリと起き上がり、頭に手をやる。恐らく記憶が混濁しているのだろう。無理もない、一週間も眠り続けていたのだから。

「眠り続けていたんだ、一週間」

「一週間も眠り続けていた？ そんなバカな——って、アンタら誰？」

氷芽の声に反応し、そこでようやく、見知らぬ二人組が自室にいることに気がついた少年。二人のことを見て、大きく瞬き。

それから氷芽たちは少年に状況を教えて、小狸に市原を呼びに行かせた。

二人になった途端、両者とも口をつむり、沈黙が訪れる。

が、先に少年が口を開いた。

「そっか……。枕返しのせいで、ずっと夢を見ていたのか」

ポツリと呟いた言葉。それから、少年の顔に自嘲的な笑みが浮かんだ。

「どうせなら、眠り続けていた方が良かったかも。そうすれば、作家になることを諦めずに済むから」

吐露された、少年の本心。恐らく、枕返しは少年のこの心の弱さにつけ込んだのだろう。そして、少年の夢の中での『書き生み出す力』を、我がものにしたかった。

全ては、自分の力を得るため。

氷芽は今回の事件について、そう結論付けた。

しかし、そう結論付けながら、氷芽は苛立ちを感じずにはいられなかった。

「どうせ俺には、才能なんてなかったんだ……」

原因は何となく理解できる。

それは恐らく、少年の態度だ。

この子と氷芽はよく似ている。互いに叶えたい願いをもち、けれど未だに叶わずにいる。

そして同じ境遇でありながら、この少年は……どうせ無理だと、夢を投げ捨てた。勝手に上限を決めて。

そのことが、何よりも苛立たせる。

氷芽は不意にその場に立ち上がり、ベッドの上で胡坐をかいている少年を、般若のような顔で見下ろした。

そして……。

「わ、ちょ、何すんだよ！」

ドンツ！ と、少年の顔面を足で踏みつけた。

もがく少年。しかし、踏みつける力は弱まることを知らない。

「そのまま聞きなさい、このバカ男」

鋭く飛ばされた言葉。

目を吊り上げた氷芽が、続ける。

「何を腐ったことを言っている。少し結果が出なかっただけで、才能がなかったと言い訳し、いじめて諦めて。男ならもつと気概を見せたらどうだ。それとも何か。キミの股間についているモノはただの飾りか？」

浴びせられる罵詈雑言。

が、健が氷芽の白い足を掴んだ。

「な、何なんだよアンタ。アンタに俺をとにかく言う権利はないだろ」

「ああ、そうだな。だが今のキミを見てみると、はらわたが煮えくりかえりそうだ。キミにとつての夢は、才能がないからと、無理だからと、簡単に諦められるような小さなものか？」

「ち、違う！ 小さくなんてない！俺は……俺は！」

目を見開いたかと思うと、真つすぐ、氷芽を見返しての言葉。さつきまで死んでいた瞳に、立派な意志の力がともっている。

これだけで容易に分かる。少年の夢が、決して下らぬものではないと。

そんな少年の胸倉を掴み、瞳を見返しながら、氷芽は顔を近づけ

た。

「ならば、その決意を徹頭徹尾貫き通せ。百回落ちても、千回落ちても、己の天井を決めることなく！」

コクリ——氷芽の言葉に、少年は確かに頷いた。

「氷芽様、さつきから黙っていらっしやいますが、どうなされたのですか？」

氷芽の耳に、ふと、小狸の声が届いた。そのおかげで思考が現時刻に戻ってくる。

傍らを見ると、心配げに瞳を揺らしている小狸がハラハラと、落ち着かなさそうにしている。

「まさか、どこか体調が悪いのですか？ 大変です。すぐに手術を」「別にどこも悪くない。仮にそうだとしても、いきなり手術は受けんからな」

「ハッ！ ならば恋煩い？ 誰ですか可憐な氷芽様を誑かした輩は今すぐ息の根を」

基本温和な小狸がそんな物騒なことを発し、氷芽は小狸の暴走を止めた。思い切り、彼を蹴飛ばして。

「バカが。全部違う」

それだけ吐き捨て、氷芽は小狸を放置して先に歩きだした。

その後から遅れ、立ち上がった小狸が追ってくる。歩幅のせいか、すぐに追いつかれた。

「しかし、今回は残念でしたね」

「何がだ？」

「酒天童子ですよ。また空振りで」

意気消沈といった様子の小狸。しかし、氷芽はそこまで悲観はしていなかった。

意志の宿った瞳のまま、前に歩き続ける。

「別に構わんさ。今回ダメでも、また次がある。そしてさらに次も。私が限界を決めない限り、終わりはない。そして私は、酒天童子を倒すという願いを、徹頭徹尾貫き通す」

何も、明日明後日の奇跡にかけているわけではない。ただ、決めているだけだ。決してあきらめないと。歩み続けてみせると。

氷芽の言葉を聞き、曇っていた小狸の顔に、満面の花が咲く。

「さすが氷芽様。カッコいいです」

「いや、それは女子に使うほめ言葉ではないからな？」

「イケイケですね」

「それも違うぞ？」

「なら……どう評しましょうか」

「いや、私に聞かれてもな」

頭を抱え、氷芽は深々とため息を吐きだした。

完

徹頭徹尾貫き通す（後書き）

初投稿です。

今回は漫画の連載でいうところの、読み切り風？ に仕上げてみました。

拙い作品ですが皆様よろしく願います。

二人の始まり（前書き）

いわゆる過去編です。

二人の始まり

—

五更館の廊下を、氷芽は両腕を組んで行ったり来たりしていた。そして、ある一室の前でピタリと足を止めて、ドアを見返した。「遅い！」

零れたのはそんな不満。

というのも、外出の約束をしていた子狸が時間になっても部屋から出てこないのだ。

さすがに時間の限界と感じたのか、氷芽はドアノブへと手を伸ばし、開けた。

ドアの向こう、部屋は至って質素な作りだった。

真っ白い壁紙の部屋に、執務用の机とベッド、本棚があるだけ。

そしてそんな執務机に上体を預けて寝息を立てている部屋の主——子狸。

部屋に侵入した氷芽はその子狸の許まで向かうが、ふと、その机の上に置かれているプラスチックケースに目を奪われた。いや。正確にはその中にしまわれている一本の小枝に。

「コイツは、まだこんなものを持っていたのか」

それは十年前。二人を結びつけたきっかけ。

二

周りを田んぼや山に囲まれた田舎。

コンクリート舗装すらされていないその道を、一台の、およそこの場とは似つかわしくない黒塗りの高級車が走っていた。

その車の後部座席。着物を身に纏っている艶やかな黒髪の少女は、流れる景色を車窓から眺め、あどけないその容姿とは不釣り合いな

嘆息をこぼした。

「まったく。この私が、こんな片田舎に追いやられるとはな」

「今回はただ、避暑に訪れただけじゃねえか」

と、運転席でハンドルを握っていた体躯のいい三十代後半ぐらいの男——高丘^{たかおか}は、十歳にもなっていないなさそうな少女にそう言った、
「もうしばらく辛抱してくれ氷芽嬢。じきに、別荘につくからよ」
「ふんっ」

そんな高丘に、面白くなさそうに鼻を鳴らして返した氷芽。

そのまま走ることしばし。窓の外を眺めていた氷芽の目に、ある光景が止まった。

「高丘、車を止めてくれ」

「おう、氷芽嬢」

急な命令にもかかわらず、綺麗に停車した。

何事かと高丘が氷芽の視線の先に目をやると、合掌造りの民家の脇で、数人の子供が輪になって何かをしていた。

「高丘、アレは？」

「何だろうな。ここからではよく分からんが……何かを囲っているみたいだな」

よく目を凝らす二人。

二人の場所からは五十メートルばかり。普通の人間の視力ではまず無理だろうが——

「狸か？」

氷芽の瞳は、子供達に囲まれている小さい狸を確かにとらえた。

ふっと鼻で一息。氷芽はドアに手をかけ、車の外へ。

「すぐ戻る。ここで待っている」

それだけ言い残し、氷芽は子供たちの許へ。

声の届く場所まで近づくと、集団のやっていることが氷芽の予想とそう大差ないことが判明してきた。

「オラ、どうしたんだよ」

「もつとなけよクソ狸が」

「気持ち悪いんだよ」

そんな暴言の数々を聞きながら、氷芽は近くにいた小柄な男の子の肩を掴んだ。

「おい貴様等、何をしている」

「あん？ 何だよお前」

氷芽の声に振り返った集団。見た目は小学校低学年、氷芽と同年くらいだろうか。

その内の一人、集団の中で一番体つきのいい男の子が一步前に出た。

「俺達の邪魔すんのかよ」

「別にそういうつもりではないが、何をしていたんだ？」

「決まってんじゃん。妖怪退治だよ」

「妖怪、だと？」

男の子の言葉に、氷芽は視線を子供たちの足元——ピクリとも動かない灰褐色の物体、狸へと向けた。

子供なのだろうか小さい体つきだが、見た目は狸そのもの。

とてもではないが妖怪には……。

「あ、もしかして妖怪の仲間か！」

子供の声。それが耳に届いた瞬間、氷芽は体をビクツと震わせた。胸が締め付けられるような錯覚を覚え、動機が早くなる。

「……どういうことだ？」

「だてそうだろ？ 妖怪のことをかばうんだからよ」

「妖怪の仲間だってことだな」

子供たちは次第に手を叩きだし、「妖怪」「妖怪」と声を合わせ始めた。

それを前に、氷芽は何も言い返すことが出来なかった。いや。正確には子供たちに構っている余裕などなかった。

脳内にちらつく過去に囚われ……。

「やめろ。私は、妖怪じゃ」

「おい小僧ども。ウチのお嬢に何してんだ？」

それは唐突だった。

車内で待機していたはずの高丘が、氷芽と子供たちの間に割って入ってきたのだ。

高丘の三白眼が子供たちを見下ろす。

「用があるんなら、代わりに俺が聞くがどうすんだ？」

指の骨を鳴らしながら高丘が近づくと、子供たちは一歩ずつ後退し始めた。が、それも当然か。子供たちからすれば、高丘がクマに見えていても不思議ではないから。

子供たちは散り散りに逃げていった。

その様子を見て、氷芽はふうつと小さく深呼吸。

「すまない高丘。助かった」

「かまわねえよ。それより大丈夫か？」

「……ああ」

なずき返し、車へと戻ろうとした氷芽。が、数歩進んだところで足を止め、くるりと振り返った。

その視線の先に映ったのは、ぐったりとして動く気配のない狸の姿。

腹部が動いているから、生きてはいるようだが……。

「ふん、くだらない」

まるで自嘲的な笑みを残し、今度こそ氷芽は車に乗り込んだ。

氷芽を乗せた車は、舗装された山道を走り、ある屋敷の前で停車した。

「到着したぜお嬢」

運転席から降り、後方のドアを開けた高丘。

促されるまま車外へと出た氷芽。そのまま辺りを見回してみる。

目の前には、立派な門構えの日本家屋……というよりも、もはや屋敷だ。その周りには木がうつそうと生い茂り、時折吹く風に葉を躍らせている。

「本当に追いやられたんじゃないかと不安になってきたな」
額に手をやり嘆息。

これだけ緑の多い場所だと、避暑と言う言葉にも納得できるが、とにかく人の気配がしなさすぎる。こんな山の中に人が住んでいたら、それはそれで驚きな気もするが。

「さあ行きますぜ」

「ああ」

黒いトランクを引きずる高丘に続き、氷芽は小走りで門をくぐった。

「お嬢。念のために確認だが、今日から三日間、アンタにはここで生活してもらう」

「生活してもらう……か。避暑にしては、随分と強制的だな」

「無茶言っな。当主の、アンタの母親の命令なんだからよ」

“母親”

その言葉を聞いた途端、氷芽はその場で足を止めた。

両手を握りしめ、視線を地面へと落とす。

「私が周りに何と言われようと関心を持たなかったあの女が、だと？」

奥歯をギリツと鳴らし、吐きだした氷芽。

その様子を見ていた高丘はやれやれと肩をすくめた。

「あの人なりに、親らしいことをしようとしたかったんじゃないのか？」

「親らしいことだと？」

ふつと鼻で笑い、氷芽は玄関の戸に手をかけ、戸を開けた。

「そんなこと、もっと別にあるじゃないか」

人の気配がない場所にしては、屋敷の中は手入れが息届いていた。廊下どころか、その脇に置かれている熊のはく製や、甲冑にも埃一つない。

氷芽は高丘に続き、その廊下を移動していた。

「随分と掃除が行き届いているな」

「そりゃ、事前に掃除だけしに来たから——と、着いたな」

ある障子戸の前で足を止めた高丘は、戸を開けた。その向こうは十五畳ほどの畳張りの部屋になっていた。

「今日からここがお嬢の部屋になるから、好きに使うといい」

「ここで三日間を過ごすのか」

嘆息しながらも室内に足を踏み入れた氷芽。

一人で使うには十分な広さと、冷房はないが土地柄のおかげか暑苦しさを感じない室内温度。なるほど、避暑にはもってこいの部屋だと氷芽は得心した。

その後、食事の準備があると高丘は退室。氷芽は障子戸の対面にあるガラス戸を開け、縁側へ。軒下に吊るされた風鈴の音を聞きながら目を閉じる。

思い返すのは、この別荘に来る前に会った子供たちの言葉。

「妖怪……か」

それは、産まれた瞬間から氷芽を縛り続ける一言。

明治初期から続く呉服店に世を受けた氷芽には、産まれた時からある噂が流れていた。

呉服店「五更」の当主である五更早苗と鬼との間に生まれたのが、氷芽だと。

真実がどうかはわからない。ただ、早苗が未婚で、氷芽の父親が不明という事実がその噂に真実味を帯びさせていた。

妖怪の血が混じった人間、混血として氷芽に向けられる畏怖・奇異・侮蔑の入り混じった視線と陰口。それに晒されながら生きてきた六年間。唯一の味方は、親代わりに自分を育ててくれた高丘だけだった。

「まだ、逃れられないのだな」

氷芽の呟きが、木漏れ日に消えた。

夕食を食べ湯あみも済ませた氷芽は、あてがわれた自室に敷かれた布団の中に入っていた。まだ十時にもなっていないが、消灯し、既

に眠る準備万端といったところだが……。

「……何だ、この感じ」

眠りに落ちるところか、氷芽の意識は冴えていた。布団に入った頃からだろうか。妙に胸がざわついているのだ。

「——目を覚ませ」

突然の声。それに、氷芽は慌てて体を起こした。

周囲に目を配る。が、誰かがいる気配は感じられない。

「こつちだ。外へ出てこい」

その声に誘われるように、立ち上がった氷芽はゆらゆらと縁側へ。サンダルに履き替えて外へと出る。

氷芽が出たのは、口の字に建てられている建物の丁度中心部分。各部屋の縁側と面している中庭だ。

「誰だ！ どこにいる」

中庭脇にある池の傍まで行き、声を張り上げる氷芽。

と、中庭の中央で影が動いた。

「ここだ」

その影の姿を見て、氷芽は息を飲んだ。

二メートルはありそうな、筋肉質の体躯。上半身には何も身につけず、ジーンパンをはいているだけ。そして最大の特徴は――

「こうして会うのは初めてだな、我が娘よ」

赤色の肌と、頭部から生えている二本の角。

それはまさしく、鬼と呼ばれる者の姿だ。

架空の存在とされていた妖怪、それも鬼を前にして息を飲みこむ氷芽。その異形を前に足がすくんでいる。が、ぎゅっと両手を握りしめて真正面から鬼を睨みつけた。

「お前は？ それに娘とはどういうことだ！」

「そのままの意味だが？ 何だ。貴様、あの女に聞いていないんだな」

そのままの意味。

文面通り受け取れば、氷芽がこの鬼の娘だと言うことの肯定だが……。

「違う！ そんな、そんなの認めない！」

かぶりを振り否定する氷芽。それに、鬼は深々とため息を吐いた。
「あくまで信じねえか。なら、これならどうだ？」

「何を——ッ！」

氷芽の胸の奥で、何かがドクンと脈打った。それはあたかも静かな水面に広がった波紋のように、次第に大きさを増す。

氷芽はたまらず自分の両肩を抱いた。

「抗うなよ、衝動に身を任せな。テメエ本来の姿を取り戻せ」

「本来の、姿だと？」

「そうだ。テメエの鬼の姿だ」

次第に体は高熱を帯び、まるで体内から燃え尽きていきそうな錯覚を氷芽は覚えた。

果たしてどれだけの時間が経った頃か。次第に落ち着きを取り戻してきた氷芽の瞳に、月明かりに照らされ、池に描かれた自分の姿が映った。

艶やかだった黒髪は白く染まり、頭部から二本の、目の前の鬼と同じような角を生やしている自分の姿が。

「何だ……この姿は」

驚愕に目を見開く氷芽。

対して、鬼は口元に笑みを浮かべた。

「それがお前の本当の姿だよ。そして何より、お前の中にこの俺の、酒天童子の血が流れている何よりの証拠だ」

凍りつく氷芽。

本当に、自分は妖怪の——鬼の子供だったのか？ だからこんな姿に？

ウソだと信じたい。こんなものは目の錯覚、あるいは悪い夢だと。けれどために頬をつねってみたところで、痛みを感じるだけ。

そのことが何より、現実だということを思い知らしてくる。

氷芽はその場に膝をつき、俯いた。

「いいねえその表情。今までかたくなに信じようとしてこなかったことが、現実、事実として突きつけられた絶望に染まった顔」

氷芽が顔を上げると、酒天童子が愉悦に歪んだ顔で喉を鳴らしていた。

「くく。無理やりあの女を孕ませ、その結果、産み落とされた teme は親の愛を失った。そりゃあそうだろうな。teme を見ればいやでも俺のことを思い出すからよ」

言われ、氷芽は自分の母のことを思い出した。

（なるほど。だったら、今まで母さんがまるで私と関わろうとしてこなかったことも理解できるな。むしろ、私のことを憎んでいたかもしれない）

納得は出来る。出来るが……。

「そして周りからの愛もしかり。誰だって、妖怪の子供と仲良くしようとは思わねえからよ」

下唇をかみしめ、氷芽は両手を強く握りしめた。

そして。

「貴様の……で……」

「あ？ 声が小さくて、何て言ったか聞こえねえな」

「貴様のせいで私は！」

咆哮を上げながら地を蹴った氷芽。

速い。人間の限界を超越した速度で、一瞬で鬼に接近する。けれどそのことに一番驚愕したのは氷芽自身だった。

「——なっ！」

普段とは段違いなその速度に、氷芽自身が反応できていない。

減速が間に合わない！

そのまま鬼にぶつかり、氷芽が目を閉じた瞬間だった。自らの半身をずらして、鬼は氷芽をいとも容易く避けた。

対して氷芽は蹴躓いて転倒。

「おもしれえな。俺の血が入っているはずなのに、もう半分が人間の血というだけで、こんなにも弱くなんのかよ」

「……の、黙れ！」

キツと顔を上げる氷芽。その双眸に宿るのは、強い怨嗟か。

自分に混血という宿命を科し、普通の人間とは違う人生を歩ませた相手が目の前にいるのだ、それも無理はないだろう。

だが、鬼は意にも介さないと云った様子で笑い声を上げている。

「憎いかこの俺が。けどな」

瞬間、氷芽は自分の目を疑った。視界から鬼が消えたのだ。

慌てて辺りを見渡す。と、そんな氷芽の前に影が差した。

鬼だ。いつの間にか、鬼が眼前に——目と鼻の先まで近接していたのだ。それと同時に氷芽は理解した。

何も消えたわけではない。ただ、自分が鬼の動きを捉えられなかっただけなのだ。

「今のテメエには、テメエから全てを奪ったこの俺様を倒せねえな」
背中に、まるで鉄球でも思いつきりとされたかのような衝撃。

氷芽の背骨が軋み、苦痛の声が漏れる。

もしも氷芽が普通の人間の状態だったら、今の一撃で、間違いない背骨を砕かれていただろう。

身動きできない氷芽の頭髪を乱雑に掴み、鬼は無理やり顔を上げさせた。

「全てを奪った俺が憎いなら強くなれ。そして殺しに来い」

ククッと漏れる笑い声。

氷芽は唇を固く噛みしめた。いや、正確には噛みしめることしかできなかった。そうしないと恐怖で体が震えてしまいそうで。

氷芽が何も反応を示さなかったことが気に食わなかったのか、氷芽を解放した鬼は反転し、舌打ちした。

「三代妖怪が一角、酒天童子。いつでもテメエの挑戦を待ってるぜ」
言い終わると同時。鬼——いや、酒天童子の体が黒い靄のようになり、やがてかき消えるように姿を消した。

一人残された氷芽。右手を強く握りしめ、地面に強くたたきつけた。

三日後。

日光の光を浴びて黒光りする車が、氷芽を乗せて、田んぼや畑に囲まれた田舎道を走っていた。

後部座席に座った氷芽は、窓枠に肘を寄せ、窓の外へ視線を向けている。

この三日間……というよりも、酒天童子の襲撃を受けてから氷芽はあることをずっと考えていた。

「お嬢。元気がないが何かあったのか？」

「いや、何でもない」

運転席でハンドルを握っている高丘にも、どこか気のない返事をし。

そんな氷芽の目にあるものが映った。

窓の外。子供たちが集団で固まって、輪になって何かを囲っているようだ。氷芽はすぐにぴんときた。

「高丘、止めてくれ」

「あいよ」

静かに停車。溜め息をつきながら、氷芽は車から降りた。そして子供たちの方へ。その途中、道端に落ちていた木の枝を手にとった。

「おい、お前達」

「ん？ こないだの」

集団に声をかけると、その内の一人が振り返った。

見覚えのある顔だ。二日前、別荘に行く途中狸をイジメていた子供の一人だ。そしてやはりと言っべきか。子供たちの中心部には見覚えのある狸の姿が。

どうやら、性懲りもなく同じことをしているようだ。

木の枝の先端を集団に向ける氷芽。

「今すぐ散れ。さもないと」

「何だよ。」

「全員、潰す」

瞬間、場の空気が変わった。冷たい空気が辺りを充満し始めたのだ。

そして。氷芽の紙が白銀に染まり、二本の角が生える。

——鬼の姿だ。

子供たちの間に動揺が走る。が、それに構う氷芽ではなかった。跳躍し、一番近くにいた子供の首筋に木の棒を叩き込んだ。そして、もう一人。

まるで舞でも踊るような連続攻撃。次第に子供達は散り散りに逃げだした。

「ふん、くだらんな」

鼻で笑い、氷芽の視線は倒れている狸へ。

「おいお前。いつまで倒れているふりをしている」

ビクツと震える狸の体。そしてゆっくりとその体を起こした。

後ろ足二本で立ちあがっても、やはり普通の狸よりも一回り小さいくらい。どことなく感じる気弱さがそう見せているだけなのかもしれないが。

狸は器用に腰を折り。

「先日続き助けていただき」

「キミはアレか、マゾなのか？」

「えっと……え？」

氷芽の突然な言葉に目を丸くする狸。構わず氷芽は続ける。

「虐げ続けられているのに反抗しないのは、そうされるのが好きだからじゃないのか？ まったく、マゾの鏡だよ」

「な。ち、違います。僕は」

段々と小さくなる狸の声。しかし氷芽は何もしゃべらない。いや、狸の次の言葉を待っているのか。

やがて狸は俯き。

「貴女には分かりませんですよ。生まれつき戦う力がない者の気持ちなんて」

「ああ、そうだな。理解したくもない」

絞り出したような狸の言葉に、氷芽はふっと鼻で笑った。

「弱い自分が嫌だったら、強くなればいい。生まれつき戦う力がないと言うのなら、これから身につければいいだけではないか」

「そんな簡単に……」

「簡単だとは思っていないさ。けど、そうするしかないのなら、為すべきじゃないのか？ 一生俯いて生きてもいいのなら話は別だな」

それだけ告げ、氷芽は反転。その場を去ろうと一歩足を踏み出すと、その時だった。

「待ってください！」

狸の声。氷芽は思わず足を止め振り返った。そんな氷芽をまっすぐ見返す狸。

「どうしてそんなに強くいられるんですか？」

「どうして、か」

小声で繰り返し、口元に僅かな笑みを浮かべる氷芽。

小さいころから『混血』として周りの人間から忌み嫌われ、親すらも頼れない中で生きてきた。自然と心も強くなるはずだ。それに……。

「酒天童子を倒すんだ。せめて、まずは想いだけは強く持たねばな」

「酒天……童子？」

「何だ、あれはそんなに有名なのか？」

「有名ななんてものじゃありません！ 三代妖怪の一角、酒天童子。名実ともに最強の鬼ですよ！ 貴女がかなう相手じゃ」

我を忘れたようにまくし立てる狸の言葉が、ふいに途切れた。

氷芽がどこか優しい笑みを浮かべていたせいだ。

「そんなものは百も承知さ。けれど、この願いだけは徹頭徹尾貫き通す」

それだけ残し、氷芽はまたも反転。今度こそその場を後にしようとする。

が、またしても。

「あ、あの！」

またしても狸に呼び止められた。

足は止めるものの今度は振り返らない。

「今度はいったいなんなんだい？ 用があるなら一度に言ってくれ」
ため息交じりの、どこかうんざりした様子の氷芽。

そんな氷芽に、狸はただ一言伝えた。

「僕と一緒に連れて行ってください！」

三

「あれからもう十年か」

酒天童子と邂逅し、そして一匹の小さな化け狸を五更家に迎え入れてから。

あの頃から自分はいったいどれだけ強くなっただろうか。

ぎゅっと両手に力を入れる氷芽。

と、変化が起きた。小狸の体がもぞもぞと動きだしたのだ。どうやら目覚めが近いようだ。

「ん？ あれ、氷芽様？」

「ようやく起きたか」

ゆっくりと顔を上げた小狸に、嘆息する氷芽。

しかし小狸はどこか焦点の合っていない、眠気眼のままだ。

「まさか氷芽様が夜這いに来てくださるなんて、感激の極み。さあ、おいしく召し上がってください」

「何を召し上がればいいのか疑問だが、とりあえず、キミがまだ夢の中ということは理解した」

頬をぼつと赤く染める小狸に氷芽は頭痛を感じた。

出会った頃の、あの気弱な狸はどこに言ってしまったんだろうか。

「それにしても氷芽様。何か御用でしたか？」

「でしたか、じゃない。仕事だ。今日の十時から依頼先に赴くと伝えておいたはずだが？」

数秒の間。小狸はポンツと手を叩き。

「そういえばそうでした。すぐに用意を」

「もう出来ている。後はキミが車を出してくれるのを待つだけだ」

「なるほど、さすが氷芽様です」

「うん。何だかその言い方は腹が立つな」

席を立ち、二人は部屋を後にした。

向かうは先日依頼のあった場所。

地図には載っていない、妖怪と人間の混血のみが暮らす小さな村

——霞ヶ森。かすみがもり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9384u/>

黒曜の鬼

2011年9月18日03時17分発行